

今週のメニュー

[トピックス](#)

夏を彩る塩ビ製品 - 空気入り塩ビ製品 -

[随想](#)

環境ディバイド(連載37)

金沢工業大学・(独)科学技術振興機構 上野 潔

[編集後記](#)

トピックス

夏を彩る塩ビ製品 - 空気入り塩ビ製品 -

もうすぐ7月です。

海開き・プール開きの季節がやってきます。

夏のビーチなどで目にする塩ビの空気入り製品を紹介します。

あまり空気入り製品というと耳慣れないかもしれませんが、浮き輪やフロート、ボート、ビーチボールなど空気を入れる製品の総称です。

代表的な製品は浮き輪です。種類も形も豊富にあります。その中でも昨年に発表した新製品は魚の形を模して楕円形の外周に魚の尾びれや背びれをつけたものや、従来、裏面には注意書きしかなかった部分にも絵柄をプリントしたものが登場し人気を博しています。



その他の製品としてはフロートがあります。よく見かける大きなシャチは、捕まったりバランスを取りながら乗って楽しむタイプですが、最近は流れるプールなどでのおんびり乗れる・漂えるタイプが人気とか。



ビーチで使うものではありませんが、庭先で子供たちが遊ぶプールも様々な種類があって、丸型・四角などなど人気があるのはトラック型だそうです。



塩ビの空気入り製品の特長は印刷性がよいので発色がよく、綺麗な色合いが出せること。そして丈夫さ。浮き輪などは高周波ウェルダ加工と呼ばれる特殊な技術で溶着させます。均一に加熱する事で溶着強度に優れ、安定した品質の製品を作ることができます。これは塩ビの持つ特性を利用した得意な加工法で、安全をさらに確かなものにしていきます。

今年もビーチやプールなどで色鮮やかな『空ビ』を見て・遊んで・楽しんで下さい。

余談ですが、

最近の大きな浮き輪は2気室構造のものが多いそうです。理由はメインの空気室から空気が漏れてもサブ(予備)の空気室があればすぐには沈まないという、安全を考慮したものだそうです。(了)

随想

環境ディバイド(連載37)

金沢工業大学・(独)科学技術振興機構 上野 潔

デジタル・ディバイド(digital divide)という用語があります。外務省のHPによれば、(<http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/it/dd.html>)

- 1) デジタル・ディバイドとは、我が国国内法令上用いられている概念ではないが、一般に、情報通信技術(IT)(特にインターネット)の恩恵を受けることのできる人とできない人の間に生じる経済格差を指し、通常「情報格差」と訳される。
- 2) デジタル・ディバイドは、(1)国際間ディバイド、(2)国内ディバイドとがあり、国内デジタル・ディバイドは、(3)ビジネス・ディバイド(企業規模格差)と(4)ソーシャル・ディバイド(経済、地域、人種、教育等による格差)に分けることができる。また、デジタル・ディバイド発生の主要因は、アクセス(インターネット接続料金、パソコン価格等)と知識(情報リテラシー等)と言われているが、動機も大きな要因であるとの分析もある。
- 3) デジタル・ディバイドは、あらゆる集団の格差を広げてしまう可能性を有しているため、その解消に向けて適切に対処しないと新たな社会・経済問題にも発展しかねない。他方、デジタル・ディバイドを解消し、ITを普及させることは、政治的には民主化の推進、経済的には労働生産性の向上、文化的には相互理解の促進等に貢献すると考えられる。

と書かれています。元々は、1999年にアメリカ商務省が発表した報告書での造語です。リユース促進はデジタル・ディバイド解消のためと称して、中古パソコンや携帯電話などの使用済みIT機器が先進国から途上国に大量に輸出され、それが途上国を汚染するE-waste(電子ごみ)になっているのは皮肉なことです。

環境分野では最近多くのディバイドが発生しています。以下は筆者の造語ですから辞書には載っていませんが。

DfEディバイド(Design for Environment divide)は、リサイクルプラントで実際に自社製品をリサイクルしている企業と、リサイクルを単に委託している企業との間に生じる格差です。設計者が実際にリサイクルの解体作業を体験できる企業の製品はDfE(環境適合設計)が進み、ますますリサイクルしやすくなります。言うまでも無くこれが可能なのは世界でも日本の電気電子情報機器産業だけでしょう。自動車産業は折角ある自動車リサイクル法のスキームのリサイクルプラントを設計にもっと利用すべきでしょう。

環境コンソーシアムディバイド (Environmental Consortium divide) は化学物質規制のディバイドです。欧州発の RoHS (Restriction of the use of certain Hazardous Substances) や REACH (Registration Evaluation Authorization Chemicals) などの化学物質規制が事実上の世界標準 (De facto standard) になっています。

これには企業単独では対応できません。企業間で情報を共有するための組織が必要です。世界中から部品材料を調達する組立て産業ではトレーサビリティが必須になりこの組織も国際的になります。自動車産業では IMDS : International Material Data Systems、電気電子産業では JGPSSI : グリーン調達調査共通化協議会 Japan Green Procurement Survey Standardization Initiative、塩ビなど素材を含む産業全体では JAMP : アーティクルマネジメント推進協議会 Joint Article Management Promotion-consortium などがあります。化学物質規制に対応するためにはこれらのコンソーシアムを利用しないと事実上ビジネスが出来ません。

環境ツールディバイド Environmental tool divide も新しい分野です。環境評価指数である LCA : Life Cycle Assessment は大半の国民が知っていますが、実際に自社の製品に LCA を使いこなしている企業はそんなに多くはありません。大手企業は別にして通常はコンサルタントによる指導が必要です。そのほかにも新しい環境評価ツールが次々と現れています。MFCA (マテリアルフローコスト会計 Material Flow Cost Accounting)、C-FP (カーボンフットプリント : Carbon Foot Print)、W-FP (ウォーターフットプリント : Water Foot Print) なども ISO 化を睨んで世界をリードするために役所も普及に力を入れています。

これらの指標は実際に製品やサービスに適用して初めて意味がわかりますが、そのためには、資料を読み有識者の講演を聴くだけでは使用することは難しく、専門のコンサルタントによる指導や講習を受けないと実際には使いこなせません。いち早く非製造ビジネスによる指導を受けた企業と出遅れた企業とでは大きなディバイドが生じるのです。

これらのディバイドを総合して「環境ディバイド」と呼んでみました。かつて流行った「QC 診断」や「VA,VE」の手法を思い出されるかもしれませんが、「環境ディバイド」の大きな特徴は、単なる利益追求ではなく「地球環境のため」「低炭素社会実現のため」などの大義名分があることです。そして「ディバイド」という名が示すとおり、法律で決められているわけではないのにそれを知らなければ格差の中に沈んでしまいビジネスでも敗北してしまうことです。

「環境ディバイド」の種類はこれからもっともっと増えると思います。もちろん長い目で見ればその中には淘汰され消えていくものもあるでしょう。しかし当面は大きく「目と耳を」そばだてていくしかないようです。企業の中のスタッフである環境部門の役割がますます重要になってきます。(了)

前回の「真摯な討論」(連載36)は、下記からご覧頂けます。

http://www.vec.gr.jp/mag/270/mag_270.pdf

編集後記

最近都内を車で走っているとガソリンスタンドがなくて困ることがあります。一方で確実に増えているのは自転車屋さん。自転車で通勤する人が増えているからなのでしょう。

健康維持のためと公共交通機関を使わなく、環境にやさしい自転車通勤は増えているんだと思います。でも車道を走る自転車はすごいスピードです。歩行者にとっては自転車も走る凶器になるので、ゆっくり走りましょう。(リマル)



関連リンク

[メールマガジンバックナンバー](#)

[メールマガジン登録](#)

[メールマガジン解除](#)



編集責任者 事務局長 東 幸次

東京都中央区新川 1-4-1

TEL 03-3297-5601

FAX 03-3297-5783

URL <http://www.vec.gr.jp>

E-MAIL info@vec.gr.jp